

目 次

第 25 回年次大会における新会長挨拶.....	2
第 26 回年次大会のお知らせ.....	4
第 2 回日本中東学会奨励賞の選考について.....	5
理事会・総会報告.....	6
第 25 回年次大会報告.....	17
【大会プログラム】.....	17
【公開シンポジウム】.....	21
【研究発表会場から】.....	22
【年次大会託児所会計報告】.....	36
【大会決算】.....	36
【大会を無事終えて】.....	37
日本中東学会年報 (AJAMES) 編集委員会報告.....	38
日本中東学会第 15 回公開講演会のお知らせ.....	40
第 3 回中東研究世界大会 (WOCMES-3) への参加について.....	40
会員の異動.....	41
寄贈図書.....	44
事務局より.....	45
編集後記.....	45

第 25 回年次大会における新会長挨拶

長沢栄治

第 13 期の日本中東学会会長として一言ご挨拶申し上げます。この場に立ちますと、今さらながら、自らのことをよく省みずに会長職を引き受けてしまったと反省の思いを新たにするとこです。これまでの歴代の会長と比べて、自らの実力、実績、識見ともに不十分であり、いわば「弱いカリフ」として就任したことで、中東学会がまるで末期のイスラーム王朝のように思われはしないか、中東学会、中東研究の水準・実力を疑われるのではないかとことを恐れるものです。

とはいえ、メンバーに若干の入れ代わりがありましたが、今期も強力な理事スタッフ、いわばマムルークやアミールたち、アミーラやマリカたちあるいは元カリフに囲まれており、また会員の皆さんにお支えいただき、任期中に学会の発展に微力を尽くことができたと考えております。

とくに、無理を申し上げて、これまでの交誼にすがって事務局長を引き受けていただいた店田廣文さんには感謝の言葉も見当たらないほどでありますし、事務局を置かせていただく早稲田大学イスラーム地域研究機構、また同機構に所属し、事務局長の補佐をお願いした貫井万里さんと錦田愛子さんの御二人にもこの場を借りて御礼申し上げます。

今後の中東研究の発展について、一言申し上げます。私市前会長が最新号のニューズレター（前号第 117 号 5 月 13 日発行）の中で、①国際的発信の促進、②専門地域とディシプリンの互いの越境を試みるという地域研究の原点、③中東研究の拠点構築の 3 点についてご意見を述べています。いずれもそれぞれ地域研究としての中東研究、すなわち個人の研究、組織的な体制の双方において本質的な点を問題提起されている卓見であると思います。ぜひそうしたお考えを皆様とともに受け止めて、研究と学会の発展に努めていきたいと思ひます。

個人的な考えを若干付け加えさせていただきますと、日本中東学会の外部に対する責任が以前にも増して大きくなっているという実感があります。昨年には、行革問題と関係して日本学術振興会カイロ研究連絡センターの廃止が取りざたされました。本学会理事が事務局長を引き受けている地域研究学会連絡協議会の仕事など、地域研究全体に果たすべき日本中東学会の役割、あるいは学術社会全体に対する本学会の責任は増していると考えるところであり、それに対して積極的な貢献を行なっていかなければならないと思ひます。

第二に、中東研究の社会的責任もまた増大しているということも皆さんが共感されることかと思ひます。いうまでもなくそれには、中東をめぐる国際関係の重

要性、とくに中東と日本との関係の変化といった背景があります。湾岸戦争からイラク戦争へといたる中でいやおうなしに迫られている課題であります。本日この総会の前に行なわれた公開シンポジウム「暴力と平和を考える～ヒロシマの視点から～」は、まさにそうした社会的な責任を果たす一つの重要な機会となったと思います。その発表者の一人の言葉を借りるなら「研究者としての場外乱闘」を強いられる場面が増えてきたということであり、以前のような「のんきな研究」をしているだけではすまされないことになったといえるかもしれません。

しかし、それと同時にこうした社会に対する責任を果たすためにこそ、これまでどおりに基礎的な研究を積み重ねていくこと、歴史研究・人類学・思想・文学研究など社会文化研究にささえられた研究、総合的な地域研究として、広い視野と伸びやかな関心をもって新しい研究分野を開拓していくことが求められているように思います。

この新しい研究領域の開拓という点に関連して、最後に個人的な感情を交えて一言申し上げたい点があります。それは、去る4月29日、半年間の闘病生活の後に天へと旅立たれた前期の理事、大塚和夫会員についてです。

「研究や学問は人の心を励ますことにその本義があること、自分自身を励まし、他の人を励ますものであること」。これは大塚さんが所長をされていた東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の昨年中東・イスラーム研究セミナーの講師としてお話しさせていただいた折に申し上げようとしたことでありました。しかし、今は「職業としての学問、研究はしばしば大きな試練や苦難を研究者自身に与えるものである」ということも、とくに今年いくつかの同輩の訃報に接して思うことです。

大塚和夫さんは、これまで本学会に数々の貢献をしていただきました。たとえば、昨年に問題となりました学振カイロ事務所の廃止問題などでも、渉外担当の理事ということもあり、研究所所長の激務の中で時間を割いていただき、またお心を煩わせました。

しかし何よりも、研究者としての大塚さんは、日本の中東・イスラーム研究の新しい分野の開拓者として奮闘され、まさに現在ある日本の中東研究の発展の主要な柱そのものでありました。大塚さんの若すぎる死は、中東研究、文化人類学をはじめとする日本の人文社会研究の学術社会全体の大きな損失、補うことができない損失であります。

お亡くなりになる一週間前の4月21日夕刻に、最初で最後の見舞いをいたしました。その際にかばんに入っていた今大会のプログラムを取り出してお話をしました。今度の大会では人類学やエジプトそのほかの地域に関する研究報告でこんなものがあると、発表者の名前を挙げてお話をしました。言葉や表情で示す力を

奪われながら、そのとき大塚さんは、私が言うことをはっきりお分かりであったということを確認しました。私たちには見聞きできない世界で、大塚さんの理性が最後まで活発に動いていたことを、最後まで理性をもって研究者として立派に生き、人生をまっとうされたことをここでお伝えしたいと思います。

明日からの各分科会の研究報告では、大塚さんに見守られているつもりでぜひそれぞれの報告をがんばっていただきたいと期待しますし、また質疑の議論にも積極的な参加をお願いしたい。学問的に厳格であり、論争的であることによって、研究の発展を信じていた大塚さんに対し、それが私たちの感謝の気持ちを示すものであると考えるからです。

挨拶が長くなってしまい恐縮ですが、私たちの研究が、大塚さんをはじめ、多くの先行者たちの無数の大きな肩の上に乗っかって行なわれていること、また彼らによって見守られていること、そしてまた今回の大会での研究報告や学会誌への寄稿をなされない多くの会員の方々によって本学会が支えられている、また見守られているということを改めてこの場で確認させていただきたいと思います。ありがとうございました。

第 26 回年次大会のお知らせ

2010 年度の日本中東学会第 26 回年次大会は、5 月 8 日（土）と 9 日（日）の 2 日間に亘り、中央大学多摩キャンパスを会場にして開催されます。実行委員会は同校の教員および同校関係者を中心に、中東学会の役員などから構成されます。

中央大学の多摩キャンパスは、都心から移転後 32 年が経過し、すっかり多摩の地に落ち着いた感じがします。また、周辺には首都大学東京、明星大学、帝京大学、多摩美術大学などがあり、大学を中心とした学園都市という構想も形成されつつあります。中央大学もこれに関連した様々な催し物に積極的に参加しています。

都心からは少し離れていて皆様方にはご不便をおかけするかも知れませんが、周辺はまだ緑が多くゆったりとした環境の中でお過ごしいただけるかと思っています。

日本中東学会は今年度 4 半世紀という節目を経過してますます規模が大きくなったことは大慶に思います。来年度からはまた新たな 4 半世紀を迎えることになります。会員の皆様方の新しい研究を歓迎し、その発表の場を提供したいと思っております。

(第 26 回年次大会実行委員長 松田俊道)

開催日時： 2010年5月8日(土)～9日(日)
開催場所： 中央大学多摩キャンパス(東京都八王子市)
実行委員会

委員長：松田俊道(中央大学文学部)

事務局長：清水芳見(中央大学総合政策学部)

委員：医王秀行(東京女学館大学)、五十嵐大介(東京大学)、岩崎えり奈(共立女子大学)、梅村坦(中央大学)、唐橋文(中央大学)、熊谷哲也(明治大学)、栗山保之(東洋大学)、新免康(中央大学)、鈴木珠里(中央大学)、福田安志(アジア経済研究所)、長沢栄治(東京大学東洋文化研究所)、店田廣文(早稲田大学)

【連絡先】 日本中東学会第26回年次大会実行委員会事務局
〒192-0939 東京都八王子市東中野742-1
中央大学総合政策学部
清水芳見研究室気付 Fax.042-674-4118(学部事務)
E-mail : shimizu@fps.chuo-u.ac.jp

第2回日本中東学会奨励賞の選考について

日本中東学会奨励賞は、本学会の設立20周年記念事業のひとつとして、「日本中東学会の若手会員の優れた研究成果の国際的な発信を奨励」することを目的とし2006年に設けられました。『日本中東学会年報』に掲載された外国語による論文、他の媒体によって出版された外国語の論文および著書』を選考対象とし、2年に1度、1名に授与することとし、有志のご寄付による奨励賞特別基金(現在高170万円)によって運営されています。第一回は2005-06年に刊行された著作を対象とし、青柳かおるさんが受賞し、07年度年次大会において授賞式を行いました。

第二回は、奨励賞選考細則にもとづき、2007-08年に刊行された著作を対象とし、本年2月に評議員による候補作の推薦を行いました。推薦があったのは2名(うち1名からの推薦は候補対象外)だけでした。選考委員会および理事会では、学会員への奨励賞の周知をはかりかつ公明な審査を行うためには、評議員からの推薦に立ち戻って選考を行うべきであると考え、年次大会総会において、経過を報告し了承をいただきました。6月末を締切に評議員からの候補作推薦を行い、7月に選考委員会を開催し、受賞作を決定いたします。その結果は、次号のニューズレターとウェブサイト等で学会員に報告するとともに、2010年度年次大会において、授賞式を行います。

なお、奨励賞受賞対象者は、当該著作の刊行時において「40歳以下の学会員」で、正賞（賞状）と副賞（奨励金 20 万円）が奨励基金から授与されます。

『日本中東学会年報』に外国語による論文の投稿をお待ちしています。

（三浦徹）

理事会・総会報告

【2009 年度第 2 回理事会報告】

日時：2009 年 5 月 16 日（土）10:00～12:40

場所：広島国際会議場・会議運営事務室

出席：長沢栄治会長、青山弘之、赤堀雅幸、臼杵陽、大稔哲也、加藤博、栗田禎子、黒木英充、桜井啓子、店田廣文、東長靖、三浦徹、山岸智子

欠席：小杉泰、小松久男、山口昭彦

[議題]（議題の詳細については次ページ以降の総会報告をご参照ください）

1. 事務局長補佐の選任について(錦田愛子会員、貫井万里会員を選任した)
2. 2008 年度事業報告・2008 年度決算報告について
3. 2009 年度事業計画・2009 年度予算案について
4. AJAMES 第 24 号編集報告・第 25 号編集計画について
5. 編集委員会委員および AJAMES 欧文率について
6. 会則改正について
7. 国際交流（WOCMES, AFMA 等）について
8. 渉外について（地域研究学会連絡協議会への対応を継続し、理事 1 名を担当として追加した）
9. 2009 年度公開講演会について
10. 会員動向について
11. 日本中東学会奨励賞の審査結果について
12. 情報化担当理事の選任について（理事 1 名を選任した）
13. 財務・データベース運用について（会費について継続審議とした）
14. 総会資料確認
15. 2010 年度大会について（中央大学での開催を承認した）

[理事の任務分掌](第 2 回理事会での追加を含む)

会長：長沢栄治

事務局長：店田廣文

事務局長補佐：東長靖

AJAMES 編集：青山弘之、加藤博、栗田禎子、山口昭彦（編集委員長）
国際交流：臼杵陽（国際交流委員長）、東長靖、三浦徹
渉外(地域研究学会連絡協議会事務局)：大稔哲也、小杉泰、黒木英充
企画：加藤博、黒木英充、小松久男、桜井啓子
財務：赤堀雅幸、小杉泰
情報化：赤堀雅幸
ニューズレター編集：山岸智子

【日本中東学会第 24 回年次総会報告】

日時：2009 年 5 月 16 日（土）17:00-18:00

会場：広島国際会議場大会議室ダリア

出席：当日出席者 68 名、委任状提出 142 名、計 210 名

（会員数 700 名、定足数 5 分の 1 の 140 名により、総会成立）

1. 司会および総会役員を選出

秋葉淳会員の司会により、議長として太田敬子会員、書記として菅瀬晶子、山中由里子両会員、議事録署名人として奥野克己、鷹木恵子両会員を選出した。

2. 2008 年度事業報告および決算報告

赤堀雅幸前事務局長および各担当理事より、総会資料に基づく報告があった。

(1)事業報告（報告：赤堀雅幸前事務局長）

- ・ 第 24 回年次大会を開催した（2008 年 5 月 24 日～25 日、千葉大学）。
 - ・ 公開講演・公開シンポジウム「パレスチナ問題と日本社会」
 - ・ 研究発表 7 会場 20 部会 55 本（発表者 58 名）（JAMES-KAMES 特設セッション 2 件 5 本、企画セッション 2 件 6 本を含む）
 - ・ 韓国中東学会から Yu Dal-Seung 事務局長を招待した。
 - ・ 第 24 回年次大会にあわせ開催した総会での承認により、学会細則第 1 条第 3 項他を改正した。
- ・ 日本中東学会年報（AJAMES）第 24-1 号、第 24-2 号の編集・出版と頒布、電子ジャーナルとしての公開の手配を行った。
 - ・ 刊行にあたり、科学研究費補助金（研究成果公開促進費）「学術定期刊行物」の助成を受けた。
 - ・ 海外研究機関他、国内外寄贈先への発送を行った。
 - ・ 国立情報学研究所論文情報ナビゲータ（CiNii）上で公開されるよう手配した。

- ・ 第 14 回公開講演会「イスラームから多文化共生を考える」を、2008 年 10 月 25 日に、神戸国際会館において開催した。
 - ・ 開催にあたり、科学研究費補助金（研究成果公開促進費）「研究成果公開発表（B）」の助成を受けた。
- ・ 第 2 回日本中東学会奨励賞受賞者を選考する。
- ・ ニューズレター和文 3 回（総頁 94 頁）を発行した。第 114 号（7/30、年次大会特集、50 頁）、第 115 号（10/10、18 頁）、第 116 号（2009/2/10、26 頁）。
- ・ 「日本における中東研究文献データベース 1989-2008」（日本語版、英語版）につき、新規業績などの調査・更新を継続し、学会ホームページにおいて公開した。
- ・ 学会ホームページおよび会員メーリングリストによる広報を行った。
- ・ 韓国中東学会第 17 回国際会議に招待を受け、私市正年会長、山尾大会員、吉岡明子会員が参加し発表を行った。
- ・ アジア中東学会連合第 7 回大会に、私市正年会長、赤堀雅幸事務局長、酒井啓子理事、臼杵陽会員、岡本久美子会員、高尾賢一郎会員、飛奈裕美会員が参加し発表を行った。
- ・ 地域研究学会連絡協議会の幹事組織として相互交流に努め、地域研究の興隆を図るとともに、大塚和夫、大稔哲也両理事が担当して同協議会の事務局を運営した。
- ・ 地域研究コンソーシアム年次集会に飯塚正人理事が出席した。同集会にあわせて国立民族学博物館内に設置されたポスター・映像コーナーで学会広報のためのポスター展示を行った。
- ・ 日本学術会議協力学術研究団体として、新法人法への対応シンポジウムに参加、新公益法人法への対応及び学協会の機能強化のための学術団体調査に協力するなど活動した。
- ・ 大学評価・学位授与機構に、大学、短期大学および高等専門学校機関別認証評価委員会専門委員候補者として、会員 8 名を推薦した。
- ・ 独立行政法人整理合理化計画による日本学術振興会カイロ研究連絡センターの廃止等見直しについて、同センターを存続させるべく行政改革推進本部事務局行政改革推進室長他に要望書を提出した。また関連学協会、研究教育機関部局に呼びかけて要望書 17 通をとりまとめ、同様に提出した。
- ・ 日本アフリカ学会からの要請に応じて、日本学術振興会ナイロビ研究連絡センターの廃止等見直しについて、同センター存続の要望書を提出した。
- ・ 東洋文庫との連携事業として「日本における中東研究文献データベース」作成にかかる、研究動向調査、データ編集と作成を行った。

- ・ 要請により、京都大学地域研究統合情報センター、筑波大学北アフリカ研究センター、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東京大学東洋文化研究所について、文部科学省による共同利用・共同研究拠点認定の要望書を提出した。
 - ・ 要請により、日本西アジア考古学会第 16 回西アジア発掘調査報告会を後援した。
 - ・ 会員調査を実施し、電子メールを使用した調査法を導入した。
 - ・ 第 13 期役員選挙を実施した。
 - ・ 海外在住の会員について、Paypal を利用した会費支払いを開始した。これによりクレジットカード払いが可能となった。
 - ・ 会員の増減：2008 年度中には入会者 32 名、退会者 37 名（うち逝去による退会 1 名、会費滞納による退会 15 名）の異動があった。その結果、2009 年 3 月 31 日現在の会員数（年度末退会者 30 名含む）は 714 名（正会員 530 名／うち海外在住 24 名；学生会員 184 名／うち海外在住 3 名）となった。
- (2) 日本中東学会年報（AJAMES）編集報告（報告：青山弘之編集副委員長）
- ・ AJEMES 第 24-1 号、第 24-2 号が無事出版された。
- (3) 決算報告（報告：赤堀雅幸前事務局長）
- ・ 総会資料 2-2 本会計収入の 2007 年度分子予算の数値を訂正（640,000→160,000）。
 - ・ 2008 年度は、会費納入の前年度比 5%増しを達成した。その結果、2009 年度への繰越金は 200 万円増額した。
 - ・ AJAMES 第 24-2 号の発送費は 2009 年度予算で計上される。
 - ・ 年次大会予算は 2009 年度に 42 万円の繰越金があった。
- <採決>以上の 2008 年度事業報告および決算報告について、総会はこれを承認した。
- (4) 監査報告（報告：後藤明監事）
- ・ 会計監査を行った結果、決算については適正であったが、将来的にみればより適正であることが望ましい。
- <質疑応答>
- ・ 奥野克己会員からの質問：事業報告の「会員の増減」は、どのような事業として理解すればよいのか。
 - ・ 赤堀雅幸前事務局長からの回答：入退会は学会の事務局が取り扱う業務であるので、事業のひとつとして数えられている。
- <採決>以上の 2008 年度監査報告について、総会はこれを承認した。
3. 第 13 期役員選挙報告および理事の任務分掌、特任理事・監事の選出

赤堀雅幸前事務局長および店田廣文事務局長より、総会資料に基づく報告があった。

(1) 第13期役員選挙報告（報告：森本一夫選挙管理委員）

- ・ 評議員選挙は、2009年1月19日に開票した結果、有権者数406名のうち、投票者数144名（うち有効票116、無効票27、白票1）、投票率35.5%により、評議員57名を選出した。
- ・ 新評議員による理事選挙は、2009年2月3日に開票した結果、有権者数57名のうち、投票者数43名（うち有効票41、無効票1、白票1）、投票率75.4%により、理事13名を選出した。
- ・ 評議員選挙に際しては、有権者に向けて最初に送付した投票用紙に不備があり、再配布を行った結果、無効票が多数に上ることになった。今後はこうした事態が生じることのないよう次回評議員選挙の手続きについて検討事項の申し送りを行い、十分に備える予定。

(2) 理事の任務分掌報告および特任理事選出報告（報告：店田廣文事務局長）

- ・ 第13期第1回理事会で承認された、理事の任務分掌および特任理事の選出について報告があった。
- ・ 店田廣文会員を事務局長、山口昭彦会員を編集委員会委員長、青山弘之会員を編集委員会委員長代行の特任理事に選出した。
- ・ 新設の情報化担当として赤堀雅幸会員を選出した。

(3) 監事の選出（報告：店田廣文事務局長）

- ・ 泉淳会員、泉沢久美子会員を監事に選出した。

<採決>以上の第13期役員選挙報告および理事の任務分掌、特任理事・監事の選出について、総会はこれを承認した。

4. 2009年度事業計画案および予算案

店田廣文事務局長および各担当理事より、総会資料に基づき、2009年度事業計画および予算案が提案された。

(1) 第13期事務局紹介（報告：店田廣文事務局長）

- ・ 2009年度および2010年度は、日本中東学会事務局が早稲田大学イスラーム地域研究機構に設置される。また事務局長補佐として、錦田愛子・貫井万里両会員が業務に従事する。

(2) 事業計画一般について（報告：店田廣文事務局長）

- ・ 第25回年次大会を2009年5月16日～17日に、広島市立大学において開催する。
- ・ 日本中東学会年報（AJAMES）第25-1号（2009年7月）、第25-2号（2010

- 年1月)の編集・出版と頒布、電子ジャーナルとしての公開の手配を行う。
- ・ 刊行にあたり、科学研究費補助金(研究成果公開促進費)「学術定期刊行物」の助成を受ける。
 - ・ 第15回公開講演会「中東と中央ユーラシア-資源、民族問題、イスラーム」を、2009年10月24日に、北海道大学スラブ研究センターの後援を受け、北海道大学において開催する(本項目について総会資料修正)。
 - ・ 開催にあたり、科学研究費補助金(研究成果公開促進費)「研究成果公開発表(B)」の助成を受ける。
 - ・ 第2回日本中東学会奨励賞受賞者を選考する。
 - ・ ニュースレターを年数回発行する。
 - ・ 「日本における中東研究文献データベース1989-2009」(日本語版、英語版)につき、東洋文庫との連携事業として、新規業績などの調査・更新を継続し、学会ホームページにおいて公開する。
 - ・ 学会ホームページおよび会員メーリングリストによる広報を行う。
 - ・ 海外の関連学会との交流を促進する。
 - ・ 第25回年次大会に、韓国中東学会からLEE Hee Soo 会長・LEE Jong Hwa 事務局長を招待する。
 - ・ アジア中東学会連合第8回大会の開催に向けて、担当の中国中東学会を支援する。
 - ・ 地域研究学会連絡協議会の幹事組織として相互交流に努め、地域研究の興隆を図る。引き続き事務局運営を引き受ける(2009年11月まで。以降未定)。
 - ・ 日本学術会議協力学術研究団体として、他団体と連絡を取りつつ必要な活動を行う。
 - ・ 学会事務局を、上智大学アジア文化研究所から早稲田大学に移転する。
 - ・ 東洋文庫との連携事業として「日本における中東研究文献データベース」作成にかかる、研究動向調査、データ編集と作成を行う。
 - ・ 2009~2010年度会員名簿を発行する。
- (3) AJAMES 第25-1号、第25-2号編集計画(報告:青山弘之編集副委員長)
- ・ AJAMES 第25-1号は、2009年6月刊行、7月発送予定で編集が進んでいる。投稿総数29本、採用14本、内訳は論文6本(うち英文1本)、研究ノート1本(英文)、学会動向1本、書評4本、博士論文要旨2本。
 - ・ 第25-2号の投稿締切は2009年6月20日であり、すでに1本の投稿がある。
 - ・ 欧文率を50%以上にすることが求められており、2008年度は56%であった。次号第25-1号では難しい。第25-2号では欧文での投稿を歓迎する。
 - ・ 連絡先を東京外国語大学に変更する。メールアドレスは変更しない。

- ・ 科研費の研究成果公開促進費の申請が、平成 21-24 年度分について採択された。助成額は 370 万円。
- (4) 2009 年度予算案（報告：店田廣文事務局長）
- ・ 科研費の公開講演会助成金が増額された。
 - ・ 2009 年度より事務局の移転費が計上された。
 - ・ 名簿の発送が 2009 年度予算に組み込まれたため、国内・海外の発送費が増額された。
 - ・ インターネット広報費は減額。
- (5) 三浦徹理事より国際交流事業に関する追加説明
- ・ 2010 年中国で開催の AFMA のために国際交流基金の助成を要請。
 - ・ 2010 年 7/19-24 にバルセロナで開催の WOCMES へのパネル企画の呼びかけ。
- <質疑応答>
- ・ 飯塚正人会員より指摘：本会計収入の欄の年会費「2006 年度以前分」というのは、「以前」も未納 の会員は除名になるため、「2006 年度分」と修正すべき（資料修正）。
 - ・ 吉村貴之会員からの質問：本会計収入の欄の「NII-ELS 著作権料」というのは何か。
 - ・ 店田廣文事務局長からの回答：CiNii から AJAMES 論文がダウンロードされる際に、著作権料が学会に入金される。
- <採決> 以上の 2009 年度事業計画案および予算案について、総会はこれを承認した。

5. 学会会則改正（説明：赤堀雅幸財務担当理事）

- ・ 「日本中東学会会則第 8 条第 2 項」にみられた文言の誤りを訂正（後掲）。
- <採決> 以上の学会会則改正について、総会はこれを承認した。

6. 日本中東学会奨励賞（説明：三浦徹理事）

- ・ 日本中東学会 20 周年事業の一環として 2006 年度に開設され、第 1 回目は 2007 年に東北大学での大会で受賞を行った。2 年おきの選考なので、今年は 2 回目。しかし 2 月に行われた選考で、評議員からの推薦は 2 名のみで、そのうち 1 名は誤解により日本語論文が推薦された。そのため 12 期評議員に再度推薦してもらい、2009 年 7-8 月に選考を行うこととしたい。受賞者はニューズレターで報告予定。授賞式は来年度の大会で行う。
- ・ 奨励賞は若手研究者に外国語論文を執筆することを促すことが目的だが、実際にはあまり進んでおらず、さらなる積極的な投稿を促す。

7. その他

- ・ 奥野克己会員より提案：総会の内容について、審議事項と報告事項を、議事次第の中で明確に分けるようにとの指摘。
- ・ 店田廣文事務局長からの回答：了解。
- ・ 私市正年会員より提案：事務局長、事務局に業務が集中しており、負担が異常に大きい。担当者自身の研究に支障が出かねない状況であることを理解頂きたい。会員から協力頂ける内容として下記を提案。
- ・ 会費の納入を速やかにすること。自動引き落としにできないか。
- ・ 住所や肩書の変更は速やかに報告すること。学生でなくなっても学生会員のまま会費を支払う人もいる。
- ・ ニュースレターの紙媒体での発行をやめるのも一案。代わりにホームページ上で掲載。
- ・ 専任の事務局員を雇い、事務局の場所をどこかに固定する。

8. 会長挨拶（長沢栄治会長）

- ・ 中東学会の外部に対する社会的責任が増大している。そのためには歴史、文化、社会に関する基礎研究の充実が必要。また、昨年の学術振興会カイロ研究連絡センター廃止問題への対応など、地域研究を中心として学術社会への貢献も重要であるとの認識。
- ・ 4月29日にご逝去された大塚和夫会員を悼む。中東研究における大きな柱であった研究者を失い、大塚会員の死は学会にとっても大きな損失。
[なお会長挨拶の全文は、本ニュースレター巻頭に掲載されています。]

9. 議事終了

- ・ 議事終了につき議長が降壇し、司会者により総会の閉会が宣言された。



2008 年度決算

本会計

収入	08年度予算	08年度決算
2007年度よりの繰越金	5,575,777	5,575,777
年会費	5,820,000	5,290,000
正・学生会員	5,820,000	5,290,000
2005年度以前分	21,000	132,000
2006年度分	160,000	76,000
2007年度分	640,000	152,000
2008年度分	946,000	990,000
2009年度分	4,053,000	3,827,000
2010年度以降分	0	113,000
賛助会員	0	0
その他	3,062,465	3,068,799
科研費出版助成金	1,300,000	1,300,650
科研費公開講演会助成金	600,000	600,355
利子	8,000	7,264
AJAMES販売代金	250,000	243,205
AJAMES広告費	0	0
東洋文庫連携事業分担金	790,000	800,000
NII-ELS著作権料	104,465	104,465
雑収入	10,000	12,860
収入合計	14,458,242	13,934,576

(単位:円)

2009年度への繰越金内訳	7,288,765
郵便振替口座	3,525,792
三井住友銀行口座	3,695,008
Paypal口座	61,226
現金	6,739

支出	08年度予算	08年度決算
事務局費	1,455,000	935,787
アルバイト謝金	1,000,000	594,385
通信費	70,000	121,725
消耗品費	220,000	98,247
会議費	25,000	8,000
交通費	20,000	0
振込手数料	20,000	8,430
事務局移転費	0	0
資料保管費	100,000	105,000
事業費	6,166,456	5,710,024
大会開催費	300,000	300,000
大会会場費	100,000	0
AJAMES24号編集費	330,000	183,290
同欧文校閲費	300,000	89,051
同印刷製本費	2,059,260	2,418,885
編集委員会交通費	200,000	128,327
ニューズレター発行費	400,000	310,275
AJAMES/NL発送費	400,000	234,660
AJAMES海外発送費	100,000	60,950
選挙費用	100,000	165,278
国際交流費	150,000	182,642
インターネット広報費	50,000	0
公開講演会開催費	650,000	651,836
学会奨励賞運営費	10,000	0
中東文献DB更新費	850,000	850,000
地域研究会協議会分担金	0	0
特別基金繰り入れ	117,196	117,196
諸雑費	50,000	17,634
支出合計	7,621,456	6,645,811
2009年度への繰越金	6,836,786	7,288,765
総計	14,458,242	13,934,576

(単位:円)

年次大会特別基金

費目	収入	支出
2007年度よりの繰越金	455,171	
第23回年次大会後余剰金	117,196	
利子	716	
第24回年次大会補填		150,574
2009年度への繰越金		422,509
合計	573,083	573,083

(単位:円)

年次大会時託児所特別基金

費目	収入	支出
2007年度よりの繰越金	32,056	
第24回年次大会後余剰金	16,524	
利子	42	
2009年度への繰越金		48,622
合計	48,622	48,622

(単位:円)

学会奨励賞特別基金

費目	収入	支出
2007年度よりの繰越金	1,200,792	
寄付	500,000	
利子	2,008	
2009年度への繰越金		1,702,800
合計	1,702,800	1,702,800

(単位:円)

2009年度予算

本会計

収入	08年度予算	09年度予算
2007年度よりの繰越金	5,575,777	—
2008年度よりの繰越金	—	7,288,765
年会費	5,820,000	5,791,000
正・学生会員	5,820,000	5,791,000
2006年度分	181,000	96,000
2007年度分	640,000	122,000
2008年度分	946,000	286,000
2009年度分	4,053,000	1,187,000
2010年度分	—	4,100,000
賛助会員	0	0
その他	3,062,465	3,346,826
科研費出版助成金	1,300,000	1,000,000
科研費公開講演会助成金	600,000	1,100,000
利子	8,000	8,000
AJAMES販売代金	250,000	250,000
海外郵送費実費	10,000	10,000
AJAMES広告費	0	0
東洋文庫連携事業分担金	790,000	800,000
NII-ELS著作権料	104,465	178,826
収入合計	14,458,242	16,426,591

(単位:円)

(参考)各年度正・学生会員会費未納額および前年度納付率

年度	未納額	前年度納付率
2005年度分		45%
2006年度分	192,000	23%
2007年度分	436,000	24%
2008年度分	985,000	59%
2009年度分	1,855,000	66%
2010年度分	5,775,000	
合計	9,243,000	

*各年度の年会費収入予算は、その年の会費未納額に、その前年度分会費の前年度における納付率に5%をかけて算出している

例)

$$2009年度分会費予想収入 = 2009年度会費未納額 \times (2008年度会費納付率 + 5) \div 100$$

支出	08年度予算	09年度予算
事務局費	1,455,000	1,510,000
アルバイト謝金	1,000,000	950,000
通信費	70,000	70,000
消耗品費	220,000	200,000
会議費	25,000	35,000
交通費	20,000	80,000
振込手数料	20,000	20,000
事務局移転費	0	50,000
資料保管費	100,000	105,000
事業費	6,166,456	6,523,830
大会開催費	300,000	300,000
大会会場費	100,000	100,000
AJAMES編集費	330,000	330,000
同欧文校閲費	300,000	300,000
同印刷製本費	2,059,260	1,993,830
編集委員会交通費	200,000	200,000
ニューズレター等発行費	400,000	500,000
AJAMES/NL発送費	400,000	450,000
AJAMES海外発送費	100,000	135,000
選挙費用	100,000	0
国際交流費	150,000	180,000
インターネット広報費	50,000	20,000
公開講演会開催費	650,000	1,100,000
学会奨励賞運営費	10,000	10,000
中東文献DB更新費	850,000	850,000
地域研究会協議会分担金	0	5,000
特別基金繰り入れ	117,196	0
諸雑費	50,000	50,000
支出合計	7,621,456	8,033,830
2009年度への繰越金	6,836,786	
2010年度会費分留保		4,100,000
2010年度への繰越金		4,292,761
総計	14,458,242	16,426,591

(単位:円)

年次大会特別基金

費目	収入	支出
2008年度よりの繰越金	422,509	
利子	295	
2010年度への繰越金		422,804
合計	422,804	422,804

(単位:円)

学会奨励賞特別基金

費目	収入	支出
2008年度よりの繰越金	1,702,800	
奨励金		200,000
利子	800	
2010年度への繰越金		1,503,600
合計	1,703,600	1,703,600

(単位:円)

年次大会時託児所特別基金

費目	収入	支出
2008年度よりの繰越金	48,622	
利子	34	
2010年度への繰越金		48,656
合計	48,656	48,656

(単位:円)

日本中東学会会則改正について

2009年5月16日の総会で、次のように会則の改正が承認されましたので、お知らせいたします。

<日本中東学会会則 新旧対照表>

旧	新
第8条 (2) 評議員は <u>一般</u> 会員の中から、正会員の投票により選任する。	第8条 (2) 評議員は <u>正</u> 会員の中から、正会員の投票により選任する。

(参考)

日本中東学会会則

昭和60年4月制定
平成12年5月13日改正
平成18年5月13日改正
平成21年5月16日改正

第1条 本学会は日本中東学会（JAMES：Japan Association for Middle East Studies）と称する。

第2条 本学会は、地域研究としての中東研究を推進し、普及するとともに、会員相互間の研究上の交流、ならびに国の内外を問わず関係機関・団体との研究上の連絡、交流をはかることを目的とする。

第3条 本学会は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 総会および年次大会の開催。
- (2) 研究会・講演会の開催。
- (3) 会誌の発行。
- (4) その他必要な事業

第4条 本学会の会員は次の通りとする。

- (1) 正会員・学生会員：中東研究に関心を持つ個人で、所定の会費を納める者。
- (2) 賛助会員：本学会の目的および事業に賛同し、所定の会費を納める個人または団体。
- (3) 会計年度は4月1日より翌年3月31日までとし、年会費は年度に先立って前納しなければならない。

第5条 本学会の会員になろうとする個人または団体は、入会申込書にその年の会費を添えて提出し、理事会の承認を得なければならない。

第6条 本学会に次の役員をおく。

- (1) 会長 1名
- (2) 評議員 若干名
- (3) 理事 若干名
- (4) 監事 2名

第7条 会長は本学会を代表し、会務を総括する。評議員は会長の諮問に応じる。理事は本学会の事業の運営にあたる。監事は会計を監査する。なお会務遂行のための委員若干名をおくことができる。

第8条

- (1) 会長は理事の中から、互選によって定める。
- (2) 評議員は正会員の中から、正会員の投票により選任する。
- (3) 理事は評議員の中から、互選によって定める。但し、理事会は会員の中から特定の任務など必要に応じて理事若干名を追加することができる。
- (4) 監事は理事会の推薦をへて、総会において選任する。

第9条 役員の任期は2年とする。但し、理事は連続3期、会長は連続2期を限度とする。

第10条 本学会は会務を遂行するため、事務局、編集委員会、国際交流委員会を置く。

第11条 本会則の実施のために、別に日本中東学会細則を定める。

第12条 本会則および細則の改廃は、総会の決議をうるものとする。

第 25 回年次大会報告

【大会プログラム】

5月16日（土）公開シンポジウム、総会（広島国際会議場）

開会の辞（宇野昌樹大会実行委員長）

パネリスト（田城明、中坂恵美子、浅井基文）

ディスカッサント（黒木英充、栗田禎子、岡野内正）、司会（加藤博）

日本中東学会総会

懇親会（会議室ラン）

5月17日（日）研究発表（広島市立大学）

9:30～12:20 午前の部

13:20～17:00 午後の部

第1部会（午前の部）

近藤信彰（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）「19 世紀後半テヘランのシャリーア法廷台帳」

秋葉 淳（千葉大学）「1845 年の地方代表者会議——タンズィマート期オスマン帝国の実験」

齊藤優子（立教大学大学院）「19 世紀オスマン帝国における近代化と西欧化——ルメリ鉄道建設を事例として」

千條真理子（明治大学大学院）「『イスラーム学術委員会』の再検討——トルコ独立戦争期におけるイスラーム主義者たち」

第 1 部会（午後の部）

平野淳一（京都大学大学院）「近代イスラーム改革主義者とパン・イスラーム主義——ムハンマド・アブドゥとラシード・リダーのスナ派/シーア派関係論」

高岩伸任（一橋大学大学院）「近代ワクフと英米信託制度の比較研究」

渡邊祥子（東京大学大学院）「植民地アルジェリアのスカウト運動におけるムルシド（教導士）——1940 年代から 50 年代にかけて」

佐藤尚平（St Antony's College, Oxford）「グローバル・ヒストリーと主権——アラブ首長国連邦、カタール、バハレーンの誕生」

第 2 部会（午前の部）

辻明日香（東京大学東洋文化研究所）「コプト聖人「裸の」バルスーマーと 14 世紀エジプト社会」

篠田知暁（京都大学大学院）「ワッタース朝治下のモロッコ北部農村における王朝と聖者」

菅瀬晶子（総合研究大学院大学葉山高等研究センター）「パレスチナ・イスラエルにおけるアル・ハディル崇敬——アラブ人社会における崇敬のありかたと、ユダヤ人市民への影響」

第 2 部会（午後の部）

役重善洋（京都大学大学院）「内村鑑三とキリスト教シオニズム」

Aleksandra MAJSTORAC KOBILJSKI（City University of New York）「ペイルートから京都へ——近代教育モデルの移動と変遷」

ナグラ・ハフィズ（Naglaa Fathy Hafez）（東京大学）「寺山修司と唐十郎による中東世界のイメージ形成——『千夜一夜物語』の受容」

小村明子（上智大学大学院）「『アッサラーム』誌から見る 1970 年代以降の日本のイスラーム」

第3部会（午前の部）

鷺見朗子（京都ノートルダム女子大学）・鷺見克典（名古屋工業大学）「アラビア語学習者におけるアラブ文化への興味と習得内容」

アルモーメン・アブドーラ（Abdalla El-Moamen）（学習院大学大学院）「日本語とアラビア語の慣用的メタファー表現に見る比喻の特性——死の表現をめぐって」

細谷幸子（東邦大学）「現代イランの臓器移植とイスラームに関する一考察」

第3部会（午後の部）

LEE Hee Soo（KAMES / Hanyang University）“A Study on Islamization of Itaewon District in Seoul”

LEE Jong Hwa（KAMES / Myong Ji University）“A Study on the Sevillian King Al-Mu'tamid in Al-Andalus”

椿原敦子（大阪大学大学院）「ロサンゼルスにおけるイラン系ムスリム組織の出現——イラン系イスラミックセンターにおける参与観察を中心に」

小島 宏（早稲田大学）「マレーシア人ムスリム元留学生の滞日中の宗教実践」

石川真作（大阪大学）「オーストリアにおけるイスラームを巡る状況に関して歴史的環境と現状」

第4部会（午前の部）

鳥山純子（お茶の水女子大学大学院）「現代エジプトにおける女性教師——学校教育の民営化を舞台に見るジェンダー」

Humayun Kabir（広島大学大学院）“Emerging Madrasa Schooling and the Social Marginalization of Religious-educated Muslims: The Case of a Municipal Town in Bangladesh”

杉山佳子（上智大学アジア文化研究所）「ルイ・マシュエルとチュニジア教育改革（1883-1908年）」

黒田賢治（京都大学大学院）「ハーメネイー体制下におけるハウザの変容——組織化と奨学金受給をめぐって」

第4部会（午後の部）

相島葉月（St Antony's College, Oxford）「エジプト国民に向けたハディースの語り——アブドゥルハリーム・マフムード(1910-78)のラジオ講義に見られる創造性と様式美」

浜本一典（同志社大学大学院）「イスラームの法原則——研究の歴史と現状と課

題」

宮下 遼（東京大学大学院）「トルコ古典文学の中の都市民衆——ファキーリー『描写の書』を中心に」

田熊友加里（日本女子大学大学院）「近代ドイツにおける「ペルシア絨毯」の流行と絨毯コレクションの成立——ベルリン美術館館長ヴィルヘルム・フォン・ボーデの功績を通して」

飯野りさ（国立民族学博物館）「東アラブ音楽文化圏における音楽理論と近代1932年アラブ音楽会議を中心に」

第5部会（午前の部）

長岡慎介（日本学術振興会）「近代イスラーム経済学史構築の試みと一般経済学史におけるその意義の探究」

堀抜功二（京都大学大学院）「ドバイ首長国におけるグローバル化戦略と行政改革」

清水 学（帝京大学）「世界同時不況と中東・湾岸地域」

第5部会（午後の部）

関口陽子（東京大学大学院）「トルコの共和人民党(CHP) 党幹部達(1965~72)——イノニユとエジェビットの対立を軸に」

岩坂将充（上智大学アジア文化研究所）「トルコにおける政軍関係の歴史的展開 政軍関係研究の視点からの再検討」

荒井康一（上智大学アジア文化研究所）「現代トルコ農村社会における資源利用と投票行動——南東アナトリア開発計画(GAP)の事例から」

若松大樹（上智大学大学院）「クルド系アレヴィーの人々の社会範疇に関する一考察——東部アナトリア・ムシュ県における事例を中心に」

第6部会（午前の部）

佐藤秀信（法務省）「イランにおける軍の社会浸透（1989-90年代半ば）——その制度面を中心に」

金谷美紗（上智大学大学院）「グローバル化時代における権威主義体制——エジプトにおけるレジームと企業家層の関係に注目して」

横田貴之（(財)日本国際問題研究所）「現代エジプトにおける権威主義体制とイスラーム運動——ムスリム同胞団の合法政党化に関する一考察」

第6部会（午後の部）

- 平松重衣子（京都大学大学院）「現代クウェートにおける市民社会の形成と女性の支持参加——イスラーム主義団体を事例に——」
- 錦田愛子（早稲田大学イスラーム地域研究機構）「レバノン内戦後のパレスチナ難民——政治的位置づけの変化と法的地位」
- 溝渕正季（上智大学大学院）「レバノン・ヒズブッラーの「抵抗社会」——武装抵抗運動と国内的諸活動を連結する理論とメカニズム」
- 小林和香子（早稲田大学大学院）「イスラエル・パレスチナ間の平和構築への取り組みの課題と展望」

第 7 部会「JAMES-KAMES 特設セッション」 Session 7: JAMES-KAMES Special Session

KIM Dae Sung (KAMES/ Hankuk University of Foreign Studies) “Muslim Communities in the Korean Society”

SEO Jeong Min (KAMES/ Hankuk University of Foreign Studies) “Teaching Children and Building Nation: The Case of Egypt”

CHANG Byung Ock (KAMES/ Hankuk University of Foreign Studies) “Rethinking 33 Years' Middle East Studies in Korea”

【公開シンポジウム】

歴史の文脈のなかで暴力と平和を語る広島で、歴史の文脈なしに今日、暴力がまかり通っている中東を研究する者たちが集って開催された公開シンポジウム「暴力と平和を考える～ヒロシマの視点から～」は、期待にたがわず、充実したものになった。シンポジウムは、三人のパネラーによる報告、三人のディスカッサント（中東学会員）によるコメント、そして質疑応答・総合討論から構成された。

田城明（中国新聞社）報告「劣化ウラン弾使用—加害と被害の実相」は、加害者が被害者に転化する劣化ウランの怖さを、衝撃的なスライドを交えながら解説するとともに、広島は核廃絶を唱えるだけでなく、劣化ウランという今日的で具体的なトピックを取り上げて平和運動を行うべきである。さすれば、広島は国際的な平和運動の先頭に立てると主張したものである。

中坂恵美子（広島大学）報告「移民・難民問題とヨーロッパの制度的暴力」は、暴力を差別として捉え、ハイレベルな人権保障をしている地域であるヨーロッパでも、今もって、「組織差別」「制度的人種主義」から脱することが出来ていない事実を、エスニック・マイノリティ・コミュニティへの具体的事件を材料に説き起こし、合わせて、ヨーロッパのイスラームフォービアに言及したものである。

浅井基文（広島市立大学広島平和研究所）報告「広島の「平和」とその含意」は、広島の平和運動がこれまでスローガンだけが先行し、具体的な課題にたいして有効な指針を示すものとはなっていない理由として、無条件・即時の核兵器廃絶を主張できなかつたこと、戦争一般に対して明確な意思表示をしなかつたこと、国家・国家権力と真っ向から対決することを避けたこと、の三つを挙げ、早急に、スローガンの含意を豊富な内容で肉付けすべきことを提起したものである。

以上の三つの報告に対して、三人のディスカッサントがコメントを述べた。栗田禎子は、スーダンへの自衛隊派遣や、『海賊対策』問題に言及することによって、日本の平和問題が中東と深く結びついていることを指摘した。黒木英充は、加害者が被害者に転化する現代の戦争の悲惨さを中東の文脈で敷衍した。岡野内正は、核兵器廃絶が出来ない理由が人びとの「無関心になる能力」にあること、そして暴力の源泉となっている貧困撲滅のために、貧者の生活を守るためのグローバル・ベーシック・インカムのプランを提案した。

最後に、質疑応答と総合討論の時間が設けられた。そのなかから浮かび上がってきたことは、一国主義と国連主義などの二項対立の問題設定を超えて、国とは何か、国際秩序のなかでの国の役割とは何か、国際社会とは何か、などという国際秩序にかかわる本質的問題であった。そのなかで、もっとも印象に残ったのは、浅井氏による、20世紀末から今世紀にかけて国際社会を示す用語が **International Society** から **International Community** へと変わってきている、という指摘である。指摘するまでもなく、後者は米国を中心とした「共同体」が含意されている。

（加藤博）

【研究発表会場から】

第1部会

第1部会の最初の2つの研究発表はいずれも堅実な文書分析にもとづきながら、射程の大きいテーマに意欲的に取り組んだものであった。まず近藤信彰氏の発表は、19世紀後半テヘラン北西サンゲラジ区に法廷を開いていた2人の高位ウラマーの3種の法廷台帳を基礎史料にして、社会史的観点から法の担い手としてのウラマーの活動を解明しようと試みた。事案としては債務関係のものが多い反面、行政関係のものが少ないこと、またそのことが法学者の国家からの独立性を示唆するとともに、法廷や台帳が法学者個人に属することなどを指摘した。同期の高位ウラマーが政治過程との関わりで脚光を浴びていることを考えれば、ウラマー本来の日常的業務に照明を当てた点は意義深いものであった。次に秋葉淳氏の発表は、従来事実関係さえ十分確定されていなかった、オスマン帝国における1845年の地方代表者会議について、同会議の招集メンバー、会議開催の背景や中央政

府の思惑、また実際の会議の開催日程や地方代表から出された意見書など、基本的な事項やデータを総理府所蔵文書や官報のような一次史料に拠りながら詳細に跡づけた。これらの作業は同会議の歴史的意義を考えることを通してタンズィマート期における中央・地方関係を探ることを目的にしていたが、地方からのイニシアティブが十分解明しきれなかったものの、全体として同会議が中央政府によって巧みに演出された一大政治イベントであったことが明らかにされた。

(黒田卓)

第1部会午前中の後半では、オスマン朝近代史に関する2つの発表がなされた。齋藤優子氏「19世紀オスマン帝国における近代化と西欧化—ルメリ鉄道建設を事例として—」は、オスマン帝国の「近代化」、「西欧化」とはいかなる意味をもっていたのかを、ルメリ鉄道建設を通じて検討を加えた発表。とりわけ、同鉄道路線の建設を請け負った投資家ユダヤ系ベルギー人ヒルシュとオスマン政府との確執から鉄道建設に伴う、西欧列強とオスマン帝国という国家間の問題と、資本・物資・労働力の流動性等当時の国家の枠組を越えた問題とを浮き彫りにした。千條真理子氏「イスラーム学術委員会に関する一考察」は、統一と進歩委員会が「世俗化」政策の過程で、シェイヒュルイスラームの職務権限の一部を引き受ける機関として創設した「イスラーム学術委員会」の活動意義を問う発表。「イスラーム学術委員会」の綱領や活動の諸記録から、同委員会が宗教教育および道徳・倫理面での啓蒙活動を担っていたことが明らかにされた。両発表が各の独創的テーマを、大きな転換期にあった当時の時代状況の中に位置づけて改めて考察することで、意義深い研究として結実することに期待したい。(江川ひかり)

平野淳一氏の発表「近代イスラーム改革主義者とパン・イスラーム主義—ムハンマド・アブドゥとラシード・リダーのスナ派／シーア派関係論」は、近代のイスラーム改革を代表するアブドゥとリダーによるパン・イスラーム主義の思想・主張において、イスラーム世界内部のスナ派とシーア派の連帯がどのように認識されていたかを検証したものである。特にシーア派へのコミットメントがより大きかったリダーについて、彼とシーア派との友好関係および緊張関係の双方が指摘された。従来の研究では、パン・イスラーム主義に関してアブドゥに宗派的側面が、リダーに政治的側面が強調されてきたが、本発表ではむしろアブドゥには政治的側面が強く、リダーには政治的・宗派的の両側面がともに確認できると評価された。

高岩伸任氏の発表「近代ワクフと英トラスト（信託）の比較研究」は、英国において発達したトラストとワクフが非常に類似しているにもかかわらず、近代以

降ワクフのみが衰退を続けている理由を、法理論から見たシステム上の問題に限定して考察したものである。財産の所有権や受託関係、管財人などについてトラストとワクフの比較が行なわれ、結論では法人を認めないイスラームにおける信託関係の位置付けといったワクフの問題や限界が指摘されるとともに、慈善や公共政策といったイスラーム的なインセンティブを取り込んだ、新たなワクフ・モデルの可能性が論じられた。(松本弘)

渡邊祥子氏の発表「植民地アルジェリアのスカウト運動におけるムルシド(教導士) —1940年代から50年代にかけて—」は、アルジェリア・ウラマー協会が1939年に結成したアルジェリア・ムスリム・スカウト連盟(SMA)と、1948年SMAから分裂したアルジェリア・ムスリム・ボーイスカウト連盟(BSMA)双方の活動を跡づけ、そこでのムルシド(教導士)の指導内容、対仏独立運動への関わり方をオリジナルな資料に基づきながら、考察している。そこから対仏独立闘争における民間文化団体の役割、その事例として、ボーイスカウト運動における反仏ナショナリズムとイスラーム主義の融合状態の在り様を明らかにしようとする。スーフィー教団との関係、他の文化団体と比較した場合のボーイスカウト運動の相対的重要性、ウラマー協会、政党とこの運動の権力関係を政治エリートとの関係として明確にすることなどについて、質問がなされた。

佐藤尚平氏の発表「グローバル・ヒストリーと主権—アラブ首長国連邦、カタール、バハレーンの誕生—」は、1968年のペルシャ湾からの英軍事撤退宣言に焦点を当て、これによりそれまでイギリスの保護下にあった首長国がアラブ首長国連邦、バハレーン、カタールとして完全独立する過程を、近代ヨーロッパ型の国際秩序(国家システム)の波及という観点から検討している。三国の「対外主権」は19世紀に英国の「非公式帝国」の政策の方便として形式的に与えられ、英軍事撤退により一方的に実体化されたのであり、西欧的主権概念の拡張は帝国主義の盛衰の副産物であると主張する。中東地域で見られた他の非植民地化の事例との共通点、相違点などについて、質問があった。(富田広士)

第2部会

第2部会午前の部は3つの報告を得た。

辻明日香氏による報告「コプト聖人「裸の」バルスーマーと14世紀エジプト社会」は、14世紀のコプトが記したアラビア語聖人伝をとりあげ、コプト聖人伝が歴史資料としての利用に耐えうるものであると論じるとともに、「裸の」バルスーマーがコプトのみならず、ムスリムからも崇敬を集める聖人であったことを示すものであった。なお、ハンドアウトではプログラム記載の題目から「裸の」とい

う表現が付け加わったが、これは同名の他のコプト聖人と区別するためであるという。

篠田知暁氏による報告「ワッターズ朝治下のモロッコ北部農村における王朝と聖者」は、15・16世紀のワッターズ朝からサアド朝へという王朝交代期のモロッコ史を、聖者ガズワーニーについての語りの再検討をとおして見直そうというきわめて意欲的なものであった。氏によれば、ガズワーニーの生涯は、異教徒に対する聖戦とサアド朝建国への貢献という従来の論点ではなく、農村地域における遊牧経済から定住経済への移行という側面から理解されるべきだという。

菅瀬晶子氏による報告「パレスチナ・イスラエルにおけるアル・ハディル崇敬：アラブ人社会における崇敬のありかたと、ユダヤ人市民への影響」は、スライドをもちいて現地の写真を紹介しながらおこなわれた。コーランの「緑の男」にあたるアル・ハディルが、パレスチナにおいては聖ゲオルギオスや預言者エリヤと同一視され、豊穡の守護者としてムスリム・キリスト教徒を問わず共通して崇敬を受けていることが示された。最初の辻報告と同様、中東地域におけるムスリムとキリスト教徒の宗教実践に重なり合う部分が少なからずあることを思い起こさせてくれる報告であった。

なお、質疑応答の際、一つの報告で声が聞き取りづらく内容が理解し難いとの指摘があった。どんなに念入りな準備をした報告でも相手に伝わらなければ意味のあるものとはならない。当該報告に限らず一般論としてもプレゼンテーションの基礎的な心構えはおろそかにすべきではないということをおぼろげに感じた。

(佐藤健太郎)

第2部会午後の部は、役重善洋氏とアレクサンドラ・マイストラツ・コビルスキ氏の発表で始まった。聴衆はそれぞれ17名、15名。

役重氏はまず、「ユダヤ人のパレスチナへの帰還」がキリストの再臨を促すと考えるキリスト教シオニズムと欧米植民地主義との深いイデオロギー的連関を指摘し、次いで近代日本における第一世代のキリスト者である内村鑑三がシオニズムを支持した背景に米国の初期キリスト教原理主義の影響があったことを提示した。さらに氏は、日本の膨張政策を厳しく批判した内村がなぜ欧米植民地主義とシオニズムの密接な関係には鈍感だったのかという問いに取り組み、非キリスト教国や近代化の洗礼を受けていない民族を「未開」と見て「文明化の使命」を掲げる植民地主義の視線を内村が内面化していた事実を解明した。

一方コビルスキ氏は、1866年にプロテスタント・ミッション American Board の手で設立された初の非宗教的正課大学 American University of Beirut が、1875年に京都で生まれた同志社英学校の1つのモデルとなった点に注目。1860年代初頭

にブトロス・アル・ブスターニが開校した普通校 al-Madrasa al-Wataniya に衝撃を受けた宣教師たちがドッジ家をはじめとする募金を得て AUB 設立に至るまでの経緯を描き出し、同じく American Board とドッジ家の支援を受けた同志社との共通点を明らかにした。アジア諸国の近代化モデルとしての役割をしばしば強調される日本だが、氏によれば、このように AUB が同志社のモデルとなったこと、また 1880 年代に憲法制定を目指した日本の政治家がオスマン帝国の動向に注目していたことを考えると、両国の関係は一方通行ではなく、アジア同士で互いに革新し合っていたと見なくてはならない。なお、両発表の後にはそれぞれ 3~4 名の聴衆による質問があり、活発な討議が行われた。(飯塚正人)

ナグラ・ハフィズ氏の報告は『千夜一夜物語』を通して寺山修司と唐十郎の作品における中東世界のイメージ形成を検討するものであった。司会の私自身が寺山の『絵本・千夜一夜物語』を読んだことがなく、唐の戯曲「アリババ」も観ていないので、報告者の意図を正確に述べることができないが、氏はアングラ運動家の演劇を日本・中東の文化交流史に大きな意味があったと高く評価する。しかし、報告や討論を聴いて二人が『千夜一夜物語』を素材に選んだ理由がよく理解できなかった。質問にも出たがそもそも寺山と唐がオリエンタリスト的な発想から自由だったのか。ただ、アングラ運動家の潜在的オリエンタリズム意識を私自身調べてみたくなったという意味で問題提起的な報告であった。

小村明子氏の報告は、宗教法人イスラミックセンター・ジャパンが 1975 年から 03 年まで刊行（現在は休刊）していた雑誌『アッサラーム』に掲載された記事を 31 項目に分類して 5 年ごとに分けて分析したものである。同誌はイスラームの紹介はもちろんだが、イスラーム諸国の政治・経済・社会・文化に関わる様々な情報、日本のイスラームやムスリムについても記事もあり、それをグラフでわかりやすく説明した。フロアーから指摘があったように、記事と時代背景との関係については 5 年ごとという機械的な時期区分ではなく、重要な事件の起った時などに注目してその傾向性を指摘すれば、この雑誌の特徴を浮かび上がらせることができたのではないかと私自身も感じた次第である。(臼杵陽)

第 3 部会

第 3 部会午前の最初の発表は、鷺見朗子・鷺見克典両氏による「アラビア語学習者におけるアラブ文化への興味と習得内容」。両氏は昨年の年次大会での口頭発表その他で、アラビア語学習における文化要素の重要性を指摘している。今回は、日本でアラビア語を専攻している学習者を対象にアンケート調査を行い、学習者がアラブのどのような文化要素に興味を持っているか、またどのようなアラビア

語スキルを習得したがっているか等を、統計学的手法で具体的に明らかにした。そして、アラブ文化要素への興味が高いほど、アラビア語習得の欲求が強いので、文化要素への興味を高めれば、アラビア語の多面的なスキル・知識の習得希望が高まる可能性がある」と推論した。質疑応答では、アラビア語のコミュニケーションな教授方法と、アラビア語のダイグロシアとの兼ね合いなどについて論議がなされた。

続く、アルモーメン・アブドラー氏の「日本語とアラビア語の慣用的メタファー表現に見る比喻の特性 ―死の表現をめぐって―」は、普遍的な概念「死」に関する比喻表現を、各種辞典やデータベースから実例を収集し、日本語・正則アラビア語間で比較対照することで、その類似点と相違点を明らかにする試み。両言語とも、死を「移動」とする概念（「この世を去る」等）を持つが、日本語が死に「眠り」のメタファーを用いるのに対し、アラビア語では死を「(神に対する)果たさねばならぬ約束または誓い」や「追跡者」と捉えていることが示された。質疑応答では、発表者の挙げた日本語の例「花と散る」は、長年病床にあった人が亡くなった場合などには使えぬ限定的な用例だとの指摘や、アラビア語の死に関するメタファーとイスラームにおける死生観との関係についての質問などがあった。

細谷幸子氏の「現代イランの臓器移植とイスラームに関する一考察―心臓移植の事例から」は、看護師である細谷氏が行なったイランでの調査報告である。イスラーム諸国での臓器移植は、死体損壊・臓器摘出に対する抵抗や、人間の体はアッラーの所有物だという考えなどの反対意見に対し、クルアーン 5:32「人の命を救う者は、全人類の命を救ったのと同じ」に基づく賛成意見もあるとのこと。法学者の見解では、モスレムの命が臓器移植でのみしか助からない場合、臓器移植は合法であり、受取人はドナーに「ディエ」を払い臓器を得ることができる（但し、これは臓器売買を認める方法であり、別の問題を孕んでいる）とし、生体移植も認められている。しかしやはり脳死の定義等が問題視されるのは、他地域と同じようだ。発表では、移植の歴史や移植関連法の変遷、移植をテーマにした映画などを題材に、心臓移植に重点を置きつつ、腎臓移植の事例なども織り交ぜ、多角的な報告がなされた。
(榮谷温子)

LEE Hee-Soo 氏の発表”A Study on Islamization of Itaewon District in Seoul”はソウル市のムスリム集住地区として知られる Itaewon 地区の多文化状況とその歴史を分析したものであった。同地区は、米軍基地の近くにありかつては歓楽街として名高かったが、同基地の移転後、米兵相手の飲食店・商店などの店舗がムスリムによって購入され、ハラール・フードのレストランやムスリム相手の商店など、地

区のイスラーム化が進んだ。報告ではスライドや地図などによってその実態が分析され、アルコール販売（答え：観光客相手の店なので可）、警察署（金曜礼拝に各国大使が来るので警護上必要）などについての質問がなされたが、同地区を訪問した質問者の具体的な質問もあり、比較研究の点でも参考になる報告と質疑であった。（長沢栄治）

LEE, Jong-Wha 氏の発表“A Study on the Sevillian King al-Mu’tamid in al-Andalus”は11世紀のセビーリヤの国王であり、かつ詩人でもあった Mu’tamid の生涯をたどりながら、アンダルス社会の豊かで寛容な側面とそれが崩壊していくイスラーム社会の変容を論じたものである。アラビア語の史料に基づきつつ、詩や文学を通じた考察であり、内容の濃い報告であった。とくに氏が強調した点は、11世紀のマグリブに勃興したベルベル帝国ムラービト朝下で進みつつあった思想的閉塞性とアンダルス社会で輝いた文明的な開放性のギャップと、そのギャップの中で苦悩を強いられていく一個人の自由な思考であったが、それが実に明瞭に説明されていた。質問にも的確にこたえられていた。いつも思うことであるが、外国からの招待報告であるのでもう少し多くの方（とくに理事の方）に足を運んでいただけたらと、残念に思った。（私市正年）

椿原敦子さんの研究発表は、ロスアンゼルスでNPOとしてI文化センターを設立したイラン系アメリカ在住者の活動を紹介し、そこに親密な公共空間が実現されているかを問おうとする試みであった。小島宏さんは、マレーシア政府による「東方政策」の一環として日本に留学して帰国したマレーシア人（ALEPS）に対して行った調査136ケースのデータを解析した結果を数値で示し、日本でのマレーシア人ムスリムの宗教実践の条件を特定しようとの試みであった。石川真作さんの発表は、オーストリアにおけるムスリムの歴史的な位置づけを検証したうえで、現代のムスリム諸団体の様相を説明するものであった。

これら3つの発表は、少数派の立場におかれたムスリムたちの社会的活動に新たな角度から果敢に取り組むものであった。移民たちの政治意識や出身地での活動との比較などについてフロアからの質問もあったが、全体として聴衆が少なかつたために、研究としての評価や今後の課題をセッション中に十分に明らかにできなかったのではないかと心残りである。（山岸智子）

第4部会

鳥山純子氏による発表「現代エジプトにおける女性教師—学校教育の民営化を舞台に見るジェンダー」は、エジプトの私立学校におけるフィールド調査に基づ

いて、現代のエジプトで教師として働く女性をとりまくジェンダーの問題を考察したものである。教師は母親のようなものと考えられており、近年の私立学校の増加は女性にとって就労の機会を拡大した。教師の収入は社会的に自立できるだけの十分なものではないが、経済的必要からではなく「自己の向上」のために就労するという考えを持つ女性が出現しており、女性の就労を当たり前だととらえる兆しについての指摘があった。このような兆しがこれからどう社会を変化させていくのか、今後の展開が期待される発表であった。

Humayun Kabir 氏による発表「Emerging Madrasa Schooling and the Social Marginalization of Religious-educated Muslims: The Case of Municipal Town in Bangladesh」は、バングラディッシュにおけるマドラサの現在の変化について Brahmanbaria という地方都市における調査をもとに考察したものである。伝統的なマドラサであるゴウミー・マドラサと政府の改革を受け入れたアリア・マドラサは社会の変化に伴い周縁化しつつある。卒業しても公的な資格が認められないことからウラマーたちは生活のために新たなマドラサを設立するため、現在マドラサの数はかえって増加しているという。また、近代化に伴った彼らなりの現実的な変化をもたらそうと努力も見られる。まさに、今現場で起きている変化を的確にとらえた発表であった。(森田豊子)

杉山佳子氏の発表「ルイ・マシュエルとチュニジア教育改革（1883—1908年）」では、フランス植民地支配下のアルジェリアで生まれ、後に保護領化されたチュニジアにおいて 1883-1903 年にかけて初代公教育局長を務めたルイ・マシュエルに光をあて、その多岐にわたる教育改革とまた当時の植民地経験について考察がなされた。世俗的な公立小学校設立の他、その近代改革の取り組みは初等から高等のアラブ・イスラーム教育にまで及んだ。しかしアラビア語やイスラームにも精通していた植民地行政官マシュエルは、植民地当局とチュニジア人改革主義エリート層との狭間で教育改革の目的などをめぐり、苦悩や葛藤も経験していたとされる。報告後には、arabisant とオリエンタリストの概念や女子教育について活発な質疑応答があった。また本発表は 2007 年フランス・エクサンプロヴァンス大学提出の博士論文に基づくものである。現代チュニジアにおけるマシュエルの評価も多少知りたく思われたが、研究が少ない分野での博士論文の公刊をまずは心待ちにしたい。(鷹木恵子)

黒田賢治氏の発表「ハーメネーイ体制下におけるハウザの変容 — 組織化と奨学金受給を中心に」は、イランのハーメネーイ現最高指導者と法学界との関係に焦点を当てたもので、最高指導者就任時に中堅法学者にすぎなかったハーメネーイ

一が、どのように法学界（特にコムハウザ）へのプレゼンスを浸透させてきたのかという問題意識のもとに考察がすすめられた。最初にハウザを管理するコム・ハウザ最高評議会の役割と構成員に着目し、ハーメネイーは、ハウザ講師組合員（マドラサの講師を務める法学者。政府役職兼任者多数）が多数派を占める同評議会を通じてハウザへの支配強化を図ってきたと結論づけた。次に奨学金の分配に着目し、ハーメネイーが他の法学権威よりも多くの奨学金を支給することで、法学生への影響力浸透を図ってきたとした。問題意識、着眼点ともに興味深いものであるが、奨学金の分配に関しては、資金源や支給額などに関する情報不足を補うために異なる角度からの調査と組み合わせる必要があるのではないかと感じた。（桜井啓子）

相島葉月氏の発表「エジプト国民に向けたハディースの語り—アブドゥルハリーム・マフムード（1910-78）のラジオ講義に見られる創造性と様式美」は、元アズハル大学総長で、マスメディアによるイスラーム教育の普及に努めたアブドゥルハリーム・マフムードのラジオ放送におけるハディース講義を、古典芸能における「型」（*uslūb*）、相島氏によれば様式性と独創性の中間」という観点から分析し、その種の「型」を通じて成立する、一方的な語り手と受け手の関係を越えた「かけあいの音楽性」の存在を指摘した。これに対し、クルアーンやハディースの朗詠・講釈に対する芸術という観点からのアプローチがどれだけ新しいものなのか、またメディア向けの「わかり易さ」と理解されるものも、実は古典的な装置として用意されたものではなかったか（周知のように、ハディースの伝達方式には、内容重視の短縮版がある）との質問があった。

浜本一典氏の発表「イスラームの法原則—研究の歴史と現状と課題—」は、欧米また日本ではまだ先行研究が少ない法原則（*al-qawāid al-fiqhiyya*）を正面から取り上げているが、法律学の立場から、法原則をいかに適用するかという実務的な問題を研究の課題とする点に特徴があった。浜本氏は、法原則の適用の態様を中東型とインドネシア型に大別し、前者の弊が古典に対する批判的精神の不足であるとすれば、後者の弊は現代生活にイスラーム法を適合させるための法原則の濫用にあるとして、その中間的立場の模索を提唱された。聴衆がやや少なかったのが残念であったが、今後の研究の展開が期待される。（堀井聡江）

宮下遼さんが、「トルコ古典文学の中の都市民衆：ファキーリー『描写の書』を中心に」と題して、16世紀トルコの都市民衆を描いた韻文作品を分析した。従来あまり注目されなかった非常に興味深いジャンルを扱っているが、「支配階層」・「選良層」と「都市民衆」を二項対立的な分析概念として前提にしてしまうこと

によって、作者自身と「都市民衆」と読者層（はたして「選良層」のみが想定されていたのか）の、もっと複雑で微妙な関係を読み落としているのではないか、という疑問が生じた。

田熊友加里さんが、「近代ドイツにおける『ペルシア絨毯』の流行と絨毯コレクションの成立—ベルリン美術館館長ヴィルヘルム・フォン・ボーデの功績を通して」と題して、ベルリン美術館の絨毯コレクション形成の背景を探った。そこに、ボーデと上層階級の収集家たちとのギブ・アンド・テイクの交友関係（一方が知識を提供、もう一方がモノを寄贈）があったことは興味深い。おそらくベルリンとライバル関係にあったであろうパリやロンドンの美術館・博物館の場合との比較があれば、さらに幅が出るのではないかと思われる。

最後に飯野りささんが、「東アラブ音楽文化圏における音楽理論と近代—1932年アラブ音楽会議を中心に」を発表した。聞き手のほとんどが民族音楽の専門家ではないことへの配慮からか、西洋音楽とアラブ音楽の音階の違いなど基礎的な説明にかなりの時間をさいたため、本題のアラブ音楽会議について具体的な論が展開されないまま時間切れとなってしまったのは残念であった。

文学・芸術関係のセッションは今大会ではこの一つのみであった。しかも午後最後のセッションであったためか、聴衆は物淋しいまでに少なかった。日本中東学会においてこれらの分野がますます少数派になりつつあるのではないかという危惧をいだきつつ、セッションを終えた。 (山中由里子)

第5部会

第5部会の最初の三つの報告に共通していたのは、世界政治経済と同時進行中の中東、とりわけ湾岸地域の政治経済状況を扱っていることである。その世界政治経済といえば、2008年9月以降の経済危機の結果、見通しの定かならぬ状況にある。それゆえに、三つの報告は、それぞれの報告者の仮説的な見通しを含む、果敢なものとなった。報告後の討論においても、将来の見通しに関するものが多かった。

最初の報告の長岡慎介「近代イスラーム経済学史構築の試みと一般経済学史におけるその意義の探究」は、イスラーム金融論として展開している近年のイスラーム経済学を、20世紀半ばごろから着手され、近代イスラーム経済学と呼称される学問領域のなかで学説史的に位置づけようとしたものである。報告者によれば、現在、イスラーム金融論は大きな転換点に差し掛かっている。ネオ理念重視派の登場に見られるように、イスラーム的理念の普遍化作業が急速に展開しているからである。

掘抜功二氏の報告「ドバイ首長国におけるグローバル化戦略と行政改革」は、

ドバイ首長国の 1990 年代以降における著しい経済成長が首長のグローバル化戦略に基づいたものであること、そしてそれを支えたのはインフラ整備をもたらした行政改革であったことを指摘したものである。報告者はこの行政改革を背景にした経済成長を「ドバイモデル」と呼び、首長国連邦政府はそれを導入したが、それが連邦レベルで根付くかどうかの評価には時間の経過が必要であるとする。

清水学氏の報告「世界同時不況と中東・湾岸地域」は、2008 年 9 月以降の経済危機が中東の湾岸地域、つまり産油国にどのような影響を与えたかを明らかにしようとしたものである。つまり、産油国は、オイルマネーを背景にした国家ファンドの存在が示すように、経済危機に対して、ほかの途上国とは異なる対応を取りえた。しかし、その負った傷は深く、そこから伺われるのは、世界経済をこれまでリードしてきた新自由主義などのモデル自体が再検討されねばならないということである。
(加藤博)

関口陽子氏の発表「トルコの共和人民党(CHP)党幹部達(1965-72) —イノニュとエジェビットの対立を軸に」は、1972 年の共和人民党のイノニュからエジェビットへの党首交代の諸要因を分析したものであった。従来いわれてきたように、共和人民党の中道左派化を決定的にしたこの党首交代は、ケマリズムの時代の終焉を象徴する出来事であるが、関口氏はその要因を、党のイデオロギー変化の観点から分析するのではなく、1960 年代に進行した党幹部の顔ぶれの変化と党の地方組織の発言力の拡大に着目して説明した。関係資料に基づいた手堅い研究であったが、単なる一野党のよくある党首交代(世代交代)では決してないこの出来事の歴史的意味を考察するためにも、トルコの政治構造と政治文化の変遷の中にこの出来事をさらに巨視的に位置付けることが重要であろう。

岩坂将充氏の発表「トルコにおける政軍関係の歴史的展開—政軍関係研究の視点からの再検討」は、トルコの政軍関係の研究において、民主化研究や政軍関係研究における諸理論の適用がどの程度有効であるのかを検討したものであった。結論として、岩坂氏は、ノードリンガー(Eric A. Nordlinger)の「将校団の権益」に着目した理論などの有効性を認め、軍の政治介入の要因や政治介入が軍自体に与えた影響について論じた。岩坂氏自身が発表の中で述べていたように、また、フロアからも指摘があったように、地域研究としてトルコの政軍関係を研究するならば、一般理論に埋没しないトルコの政軍関係の独自性を抽出し、トルコ軍の特殊な存在意義と役割を明らかにしていくことが今後さらに求められるであろう。疑いなく重要な研究テーマであるので、氏の研究のさらなる進展を期待したい。
(粕谷元)

荒井康一氏の発表「現代トルコ農村社会における資源利用と投票行動 —南東アナトリア開発計画（GAP）の事例から」は、政治社会学、計量分析の立場から、表記地域における灌漑開発による水資源・農地の変革と国会議員選挙における投票行動の関係を報告している。投票結果に見る地域住民をエスニシティやクライアントリズムの社会関係の分類から、いかに投票行動の特徴があらわれ、いかに資源分配がなされているかを論じようとしていた。しかし、事例に基づいた発表であるにもかかわらず、エスニシティの事例がなんであるのか、投票行動の計量的事例がどうであったのかなど、提示の整理不足は否めず残念であった。この点は今後の研究進展に期待したい。

若松大樹氏の発表「クルド系アレヴィーの人々の社会範疇に関する一考察 —東部アナトリア・ムシュ県における事例を中心に—」は、表記地域における「クルド系アレヴィー」なる社会範疇を、先行研究における捉え方に「混乱」があるとして、自ら収集した現地の事例に「民族」なる概念を導入して「混乱」から「整理」に向かう試みであった。整理は、かれらについて語る発表者の「民族」も、かれらが示す「アレヴィー」なる「民族」も、「名」により表出されることで自明視の事態であるとしてすすめられ、詳細な事例報告につなげていった。質疑応答では、認識論上の議論にはすすまず、「名」との向き合いの現地の状況への理解となった。フィールドワークにもとづく周到な事例報告と考察であり、第5会場を締めくくるにふさわしい「締めり」のある発表であった。（奥野克己）

第6部会

佐藤秀信氏の「イランにおける軍の社会浸透（1989～90年代半ば）」は、ハーメネイ政権がその始動期において、体制安定化のためにどのように軍（とりわけバシージェ）を社会に浸透させていったかという問題を、制度構築に着目することで明らかにした。具体的には、バシージェをめぐる法制度の整備を概観した上で、バシージェの非軍事活動化の拡大を、文教・治安・経済の3側面から分析したことで、これまで明らかではなかったバシージェの社会浸透の実態を解明した。情報収集が非常に困難なテーマを見事に分析した大変興味深い報告であったが、バシージェの社会浸透とハーメネイ体制の安定化との因果関係の解明が次の課題となった。

金谷美紗氏の「グローバル化時代における権威主義体制」は、昨今の中東政治研究の流行となっている権威主義体制の頑強性に着目し、エジプトの権威主義体制の安定を、経済のグローバル化との関係から明らかにした報告であった。経済自由化政策導入以降のエジプトでは、企業家が権益の拡大のために政権とのパトロン・クライアント関係をより強化した。金谷氏は、そのパトロン・クライエン

ト関係がエリート層による政権支持を担保した結果、権威主義体制が維持されることとなった、と結論付けた。経済のグローバル化との関係で、実証的にエジプトの権威主義体制の持続性を証明した興味深い報告であったが、既存の官僚的権威主義体制論とどのように差異化を図るか、クライエントリズム関係に入らない勢力をどう評価するかなどの課題が残った。

横田貴之氏の「現代エジプトにおける権威主義体制とイスラーム運動」は、金谷氏が指摘する政権のパトロン・クライエント関係の枠外にあるムスリム同胞団が、権威主義体制の政策に対していかなる戦略を取っているのかという問題を扱ったものであった。ムバーラク政権は、暴力的抑圧、法改正による活動の制御、限定的コオプテーションによって同胞団の管理を試みてきた。このような政権の政策への対抗戦略として、同胞団内には、合法政党化を目指す活動、民主化活動、社会動員活動などの立場があるが、現在は合法化を目指す活動が活発化していることが、実証的に明らかにされた。

3 報告とも、中東政治研究の動向を踏まえ、当該国の政治状況を精査した極めて意義深いものであった。 (山尾大)

第6部会午後の部は、平松亜衣子会員が、「現代クウェートにおける市民社会の形成と女性の政治参加」について発表。クウェートでは、05年、イスラーム主義勢力も賛成して、女性参政権が実現し、06年と08年に、女性選挙権者、同候補者も含む普通選挙が行われたが、全員落選したことを紹介、投票行動を分析した。いずれも、女性有権者の多くが男性候補に投票、彼女らが、必ずしも自身の判断で投票したとは見られないことなどを指摘した。おりしも、同日、クウェートでは、06年以来3度目の選挙が行われ、4人の女性候補が当選している。

続いて、錦田愛子会員が「レバノン内戦後のパレスチナ難民」のテーマで報告。ここで、とくに興味を引いたのは、1994年6月の国籍付与。この時、レバノン在住の「外国人」約30万人に「レバノン国籍」が付与されたが、うち、シリア人の労働者や兵士が約半数、パレスチナ人は、「7つの村」出身者に限定され15%ほど。対シリア関係や、レバノンとイスラエルの休戦ライン近くにあった「7つの村」への領土要求など、一国を超えた域内政治がいつも国籍問題に関わっていることが強調された。パレスチナ難民のレバノンにおける法的地位一般も、すぐれて深刻な政治問題であることは、周知のとおりである。 (奈良本英佑)

溝渕氏は、「レバノン・ヒズブッラーの「抵抗社会」—武装抵抗運動と国内的諸活動を連結する理論とメカニズム」と題し、対イスラエル抵抗運動で数々の「勝利」を収めたヒズブッラーについて、同派がどのような理論に基づいて活動し抵

抗運動の「勝利」を実現したかについて報告した。この報告は、国外からの支援、兵器の入手、イスラエル側の過失のような表層的な分析が主流となっているヒズブッラーの「勝利」について、「抵抗社会」建設というヒズブッラーの活動を基軸にヒズブッラーの側の要因を分析した試みであり、社会活動のネットワークと「抵抗文化」の浸透を通じて社会全体で対イスラエル抵抗運動を支えたことを「勝利」の要因と結論付けた。質疑では、ヒズブッラーが伝統的なゲリラ戦の方法論を熟知していた点、国際的要因や構造的要因など「抵抗社会」以外の変数も考慮した分析が必要となる点について議論が行われた。

小林氏は、「イスラエル・パレスチナ間の平和構築への取り組みの課題と展望」と題し、1993年から2000年までのイスラエルとパレスチナの間の平和構築の取り組みを、People - to - People (略称 P2P) を中心に検証した。報告では、P2Pプログラムが意図する紛争解決に向けた理論的な枠組みと実際に行われた諸般の活動が紹介され、その中でオスロ合意に基づく和平プロセスが失敗に終わりプロジェクト自体もさしたる成果を上げることができなかった原因について考察が加えられた。質疑では、いわゆる「2 国家解決」を前提とするオスロ和平プロセスを下支えする存在としての P2P プロジェクトの限界についての指摘、イスラエル・パレスチナの双方でプロジェクトの参加者が社会的影響力を持ち得なかったという点について議論が行われた。

なお、本セッションではレジュメの不足やレジュメ配布の遅れ、PC 機材設営の不手際があり、報告の要旨や意図を十分に伝えることができなかったことが危惧される。時間的に制約がある中でのロジ面でのつまずきは報告者にとっても参加者にとっても致命的であることから、報告者・運営当局・参加者・司会者が一体となって円滑な報告の運営を心掛けるべきであると痛感した。(高岡豊)

第7部会 JAMES-KAMES 特設セッション

日本中東学会は、韓国中東(KAMES)学会と長年、研究交流を行ってきた。KAMES の国際大会には近年、日本中東学会から若手を中心に参加、研究報告を行っている。日本中東学会も、KAMES から会長や事務局長など学会役員を年次大会に招聘してきたが、今次大会では初めて、KAMES からの自発的なセッション参加の希望が、若手研究者を含めてあった。表敬訪問を超えた、今後の日韓の本格的な研究交流の可能性を開くのではないかと。KIM Dae Sung 氏の「韓国におけるムスリム社会」は韓国での中央アジア出身者のプレゼンスの大きさを示した報告で、前 KAMES 会長の「韓国中東研究史 33 年」との報告と合わせ、日本の類似研究と比較するとおもしろいだろう。SEO Jeong Min 氏の「エジプトでの子供教育と国家建設」は、中間報告的なものだが研究の最終結果が楽しみである。余

談だが、SEO氏は私がカイロ・アメリカン大学に滞在中のクラスメートだった。10年ぶりの再会。今後は海外調査経験を共にした日韓アラムナイのネットワークもありうるのではないだろうか。(酒井啓子)

【年次大会託児所会計報告】

収入		支出	
繰越金	48,622	保育料	4,000
利用料(1名)	2,000	保育サポーター交通費	1,000
		次年度繰越金	45,622
計	50,622	計	50,622

【大会決算】

収入		支出	
大会開催費	300,000	封筒・封筒印刷費	8,085
参加費(事前123名)	123,000	振込用紙印刷代	800
参加費(当日54名)	54,000	大会プログラム等送料	62,640
懇親会費(正84名)	420,000	文房具	9,511
懇親会費(学生41名)	164,000	発表報告要旨集印刷費	91,350
弁当代(88名)	88,000	公開シンポジウム会場付属施設利用料金	17,030
錯誤振込	28,000	会議運営事務局利用料金	16,900
書店寄付	5,000	懇親会費	509,428
		弁当代	102,000
		公開シンポジウムのパネリスト謝礼(3名)	60,000
		公開シンポジウム打ち合わせ会パネリスト	1,366
		飲み物代	
		アルバイト謝金・交通費	120,000
		錯誤振込返金	28,000
		当日の飲み物代	7,355
		振込手数料	1,550
		アルバイト慰労費	50,000
計	1,182,000	計	1,086,015
		収支差引残高	95,985

【大会を無事終えて】

まず、大会実行委員長として、大会が大過なく無事に終わったことに、ホッとすると共に、献身的に協力してくれた実行委員会メンバーの方々には心から感謝したい。広島市立大学という、地方の小規模の大学で、全国規模の学会の年次大会を開くこと自体、大いに「無謀な」ことであり、引き受ける旨の返事をした後に、幾度となく自らの決断を悔いたものである。今回の大会が無事に終えることが出来たのは、主催校の関係者の方々のお力もさることながら、広島大学や広島修道大学から実行委員会メンバーとして参加して下さった方々、また学生、院生の皆さんの協力のお陰であり、重ね重ねお礼を述べておきたい。

今回の大会参加者は、事前申込数が 123 名、当日申込数が 54 名で、合計 177 名であった。地方大学での開催であったことを考慮すると、まずまずの数ではなかったかと思う。研究発表の方は、6 部会と特別セッション（韓国中東学会からの研究発表）が 1 つの 7 部会が設けられ、47 本の発表が行われた。地域研究の学会に相応しく、研究発表のテーマは実に多彩で興味を引かれるものが多々あったが、どの発表をどの部会に入れるか、実行委員会メンバーを大いに悩ませてくれた。

話は前後するが、研究発表前日に行われた公開シンポジウムのことに触れておきたい。テーマは、被爆地広島で開催されることを意識し、「暴力と平和を考えるーヒロシマの視点から」としたが、これは実行委員会できいろいろと議論した末に決まったものであることを付言しておきたい。参加者数は、120ー130 名程度で、半数が会員、半数が非会員の一般参加者であったかと思われる。実は、事前に新聞各社へシンポジウムの開催案内の記事を掲載してくれるように文書で要請しており、地元紙の中国新聞がそれに応えて、小さな記事ではあったが、掲載してくれていた。60ー70 名の一般参加をどのような数字と考えるか難しいところであるが、主催者側としては、会員、非会員を問わず、もう少し多くの方々の参加があれば尚のこと良かったとの思いである。

このシンポジウムで強く印象に残っていることは、パネリストの一人として報告して下さった広島市立大学平和研究所の浅井所長の次の言葉である。彼曰く、「ピース・ビルダーズ（広島を拠点として、平和構築を活動目的とする NPO 団体）の活動はアメリカの方を向いた活動だと考える。」浅井氏のこの言葉は、この団体を直接批判、ないし非難したくて、発言した訳ではなかろう。平和を構築するという言葉の響きは良いものである。そのための活動も無論大切である。しかしながら、一般的に平和を目的として活動している NPO や NGO などは、何のための、また誰のための「平和」構築なのか、そのことを十分に考える必要があるのではないか。そのような発言ではなかったか。そして、それは中東を研究対象

としている我々にも同様に向けられた言葉ではなかったか。パレスチナ問題やイラク問題を考える時、肝に銘じる必要がある。

最後に、発表者の皆さん、大会に参加された皆さんへ、一言。大会は、大きな問題も起こらず、概ね上手く運んだかと思う。しかしながら、至らなかった点もあったかと思う。例えば、研究発表要旨集が不足して、一部の方々へお渡しできなかった。ご迷惑をお掛けしたことを、心からお詫び申し上げます。

(宇野昌樹)

日本中東学会年報(AJAMES)編集委員会報告

『日本中東学会年報』編集委員会より、ご報告いたします。

1. 編集進捗状況

『日本中東学会年報』25-1号が2009年7月に刊行されます。論文6作(うち英文1作、和文5作)、研究ノート1作(英文)、その他(書評、博士論文要旨、報告)7作(英文)が掲載されています。7月中には会員のみなさまのお手元お届けしたいと思います。

『日本中東学会年報』25-2号(2009年12月刊行予定)への投稿締切は6月20日をもって終了しました。たくさんのお原稿をいただきありがとうございます。

『日本中東学会年報』26-1号(2010年6月刊行予定)の投稿締切は2009年12月20日です。論文、研究ノート、書評、博士論文要旨など、各ジャンルへの投稿をお待ちしております。

2006年より本誌は国立情報学研究所論文情報ナビゲータ(CiNii)を通じて掲載論文を全世界に配信しており、下記に示しました通り、閲覧件数も順調に伸びています。海外の研究者が本誌を参照する機会も増えておりますので、英語による研究成果の発表を検討されている方は是非本誌に投稿ください。

原稿の投稿先および連絡先は以下の通りです。

〒183-8534 府中市朝日町3-11-1

東京外国語大学総合国際学研究院 青山弘之研究室気付

『日本中東学会年報』編集委員会

ajames-editor@tufs.ac.jp

2. 文科省科学研究費(研究成果公開促進費)「学術定期刊行物」

第25回年次総会で報告しました通り、『日本中東学会年報』は今年度から4年間の予定で文科省科学研究費(研究成果公開促進費)「学術定期刊行物(欧文誌)」

の交付を受けることになりました。これにより本誌は引き続き、欧文率 50%以上を前提とする欧文雑誌としてやっていくことになりましたので、英文による特集の企画がありましたら、是非お寄せ下さい。

3. 国立情報学研究所論文情報ナビゲータ (CiNii) での閲覧件数

国立情報学研究所論文情報ナビゲータ (CiNii) を通じた本誌の閲覧件数 (2006年の開始以来) をお知らせします。

2006 年

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
			8	23	12	13	10	4	14	17	11	112

2007 年

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
85	72	43	130	219	276	201	253	100	164	185	258	1986

2008 年

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
238	110	99	107	253	448	465	108	125	303	236	250	2742

2009 年

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
293	97	1051	267									1708

上記の表の通り、閲覧件数は順調に伸びております。

4. 2009 年度『日本中東学会年報』編集委員

2009 年度『日本中東学会年報』編集委員は以下の通りです。

編集長：山口昭彦

編集長代行：青山弘之

副編集長：山中由里子

編集委員：池田美佐子、粕谷元、加藤博、近藤信彰、竹下政孝、縄田浩志、藤元優子、松永泰行、松本弘、水島多喜男、村上薫、D. F. Eickelman、R. S. Humphreys、A. K. Rafeq

どうぞよろしく願いたします。

(青山弘之)

日本中東学会第 15 回公開講演会のお知らせ

本学会の 15 回目の公開講演会を下記の要領で開催します。

テーマ：「中東と中央ユーラシア——資源、民族問題、イスラーム」

日時：2009 年 10 月 24 日（土）午後 2 時から午後 5 時 30 分まで

会場：北海道大学学術交流会館（札幌市北区北 8 条西 5 丁目；JR 札幌駅より徒歩 7 分）

講師：清水学（会員）、保坂修司（会員）、宇山智彦（北海道大学・非会員）、本村眞澄（石油天然ガス・金属鉱物資源機構・非会員）

コメンテータ：加藤博（会員）、岩下明裕（北海道大学・非会員）

参加費：無料

今回は、中東と隣接する中央ユーラシアとを共に視野に入れて、石油、天然ガスなどエネルギー資源の問題の実相を正確に把握するとともに、そこで生起している民族問題・イスラーム運動の動向を議論します。さらに、地球大の国際政治の激しい変動の中で、日本がエネルギー資源を大きく依存している両地域にいかに向かい合うべきか、という方向性について問題提起することを目指します。そのために、両地域に通暁した経済・政治の専門家を、学会の枠を越えて招き、研究成果を踏まえた最新の情報を社会に向けてわかりやすく発信したいと考えています。

本講演会については、中央ユーラシア地域に関して先端的研究を進める北海道大学スラブ研究センターの後援を頂くことになりました。また科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の支援も受けて開催します。

本学会の公開講演会は、これまで主に首都圏で開催してきましたが、近年は山口、長野、神戸でも開催しています。北海道での開催は今回が初めてです。どうぞ秋深まる札幌にお越し下さい。

（黒木英充）

第 3 回中東研究世界大会 (WOCMES-3) への参加について

2002 年マインツ（ドイツ）、2006 年アンマン（ヨルダン）に引き続き、2010 年 7 月にバルセロナ（スペイン）で第 3 回中東研究世界大会（The Third World Congress for Middle Eastern Studies: WOCMES-3）が開催されることになりました。

JAMES では、過去2回の WOCMES において、国際交流基金の助成をえて日本の中東研究の発信と交流のため、学会としてパネルを組んできています。今回も、現在進行中のイスラーム地域研究プログラム等と連携しつつ、パネルの組織と国際交流基金への助成申請を予定しています。

大会は、2010年7月19-24日にバルセロナにある Universitat Autònoma de Barcelona (UAB)を会場に行われます。

詳細については、WOCMES-3のホームページ

<http://wocmes.iemed.org/en/home>

をご覧ください。

参加登録は、ホームページを通じて行うことができます。

パネル申込期限は今年12月15日です。個人やJAMES以外の何らかの枠組みを用いて、発表やパネルの組織を直接申し込むことも可能です。

JAMES としてのパネル組織について、ご提案がありましたら、8月末までに日本中東学会事務局宛にご連絡ください。また本件についてのご質問がありましたら、国際交流担当理事にご連絡ください

(東長靖)

会員の異動

【新入会員】

石田 友梨

金子 寿太郎

河村 有介

菊地 達也

近藤 百世

清水 直美

鈴木 珠里

福永 浩一

ダニシマズ・イ
ディリス

LEE Yong Bin

【所属先・連絡先の訂正・変更】

臼杵 陽

江川 ひかり

大川 (黒宮)

玲子

重親 知左子

勝本 英明

勝沼 聡

川久保 一美

北川 誠一

木村 英亮

黒宮 貴義

近藤 久美子

佐藤 健太郎

高木 小苗

谷垣 博保

永田 雄三

中村 明日香

貫井 万里

速水 美緒

深見 奈緒子

福島 康博

宮下 遼

三代川 寛子

山内（高原）

かおり

Darwisheh
Housam

【2008年度末をもつての退会者】

松本 健

【物故者】

大塚和夫（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所所長）

寄贈図書

【単行本】

中東イスラーム研究教育プロジェクト編『緊急集会 イスラエルによるガザ侵攻を考える 講演録』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2009年。

中田考監修『砂丘を越えて—現代サウディ文学選集』伊藤真恵訳、日本サウディアラビア協会、2009年。

浜本一典、中田考、松山洋平、前野直樹共著『イスラーム私法・公法概説—家族法編』日本サウディアラビア協会、2009年。

山中由里子『アレクサンドロス変相—古代から中世イスラームへ』名古屋大学出版会、2009年。

【逐次刊行物】

『地域研究』Vol.9 No.1 京都大学地域研究統合情報センター、2009年。

『日本クウェイト協会報』No.221 日本クウェイト協会、2009年。

『日本サウディアラビア協会報』No.221 日本サウディアラビア協会、2009年。

『民族紛争の背景に関する地政学的研究』Vol.4～Vol.7 大阪大学世界言語研究センター、2009年。

Bulletin of the School of Oriental and African Studies, vol. 72, no.1, Cambridge University Press, 2009.

Journal of the American Research Center in Egypt, vol. 43, the American Research Center in Egypt (ARCE), 2007.

事務局より

早稲田大学での事務局体制がスタートしてから、2ヶ月が経過しました。日常的業務の全体像が何とか把握できるようになってきたところですが、これからAJAMESの発送作業や公開講演会の準備など初体験の業務が続き、なかなか気を緩めることが出来ないと言った状況です。事務局長補佐として、東長靖理事にお願いし、さらに錦田愛子会員、貫井万里会員には、日常的に事務局業務をお願いすることになりましたが、そのことによって事務局が順調に機能しているのが実態です。改めて、感謝いたします。また、当分の間、前事務局長の赤堀雅幸理事のサポートも欠かすことが出来ません。このような現状ですが、大会、講演会や国際交流など学会活動全般は、会員の皆様のご協力によって成り立っております。これからもお力添えのほどよろしくお願い申し上げます。

ところで、本学会ではメーリングリストによるメール配信が行われており、研究会・催しや学会からのお知らせに利用しております。メールアドレスを学会に登録しているにもかかわらず、お知らせ等がここ数ヶ月届いていない場合には、アドレスの不具合によるものと思われまます。お手数をおかけしますが、配信可能なメールアドレスを事務局宛にお知らせ下さい。同時に、名簿へのメールアドレス掲載可否についても、お知らせいただければ幸いです。

最後になりますが、長沢会長の大会挨拶にもありましたように、本年4月末に大塚和夫会員がご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。なお、AJAMESの25-2号に追悼記事を掲載する準備を進めておりますので、このことも併せてお知らせします。

(店田廣文)



編集後記

YouTubeなどでテヘランのデモの光景を見ながら、こうしたメディアによる情報をどのように読み解くべきか、今後の課題だと強く感じる日々。日本中東学会ニューズレターは、その意味ではオーソドクスなメディアですので、会員を悩ませることも少ないぶん、もうちょっと刺激的でビジュアルな情報をお届けしたいのに、という思いもあります。第13期理事会によるニューズレターもどうかよろしく。

(山岸智子)

会費納入のお願い

本会は会費前納制をとっております。2010 年度およびそれ以前の会費に未納がある方は、本号のニューズレターに郵便振替払込用紙が同封されておりますのでご利用ください。AJAMES に未送付分がある場合は、2009 年度以前の未納分会費の払込確認後お送りいたします。また、中央大学における年次大会での研究発表や AJAMES への論文投稿を予定されている会員の方は、是非とも会費納入を宜しくお願い申し上げます。なお、請求会費額は 2009 年 6 月末日の振込確認に基づいておりますので、その後に納入され、請求に行き違いが生じた場合にはご寛恕ください。

日本中東学会ニューズレター 第118号

発行日 2009年7月24日
発行所 日本中東学会事務局
印刷所 東洋出版印刷株式会社

日本中東学会事務局

〒162-0041
東京都新宿区早稲田鶴巻町 513 番地
早稲田大学 120-4 号館 3 階
早稲田大学イスラーム地域研究機構気付
日本中東学会事務局
電話/ファクス：03-5286-1966
Eメール: james@db3.so-net.ne.jp
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/james/>
郵便振替口座：00140-0-161096(日本中東学会)
銀行口座：三井住友銀行渋谷支店(普)5346808
(日本中東学会 代表 長沢 栄治)
ゆうちょ銀行口座：〇一九店(当)0161096
(ニホンチュウトウガクカイ)